

清水港海洋文化拠点施設基本構想

平成29年6月

静岡市

目 次

1	はじめに ～本基本構想の位置付けと概要～	1
2	海洋文化拠点施設の整備の背景	2
2-1	目指す都市のビジョン「国際海洋文化都市・清水」	2
2-2	日の出地区における海洋文化拠点の創出	4
2-3	海洋文化拠点施設整備の必要性	5
3	海洋文化拠点施設の基本的な方針について	6
3-1	施設のテーマや利用の想定	6
3-2	施設の機能や運営の基本的な方針	8
3-3	施設の規模・立地等の想定	16
4	「海洋文化拠点施設」の実現に向けた進め方	18
4-1	事業手法の考え方	18
4-2	今後の進め方	19
	参考資料	22

1 はじめに ～本基本構想の位置付けと概要～

港町・清水は、海とともに、港とともに発展してきました。

現在の次郎長通り付近にあった江戸時代までの清水湊を経て、近代に入ってから、現在の日の出地区に波止場が築かれ、これを起点に、明治から昭和・平成にかけて、臨海部の埋め立てが進み、鉄鋼業、製材業、物流、漁業などの様々な産業が集まることで、港湾工業都市として、まちは賑わい、活気にあふれました。

しかし、1980年代をピークとして、我が国の産業構造が大きく変化する中、清水港周辺の産業、経済にも変化が現れ、近年は、まちな活力低下や人口減少などが顕著になりつつあります。

一方で、清水港は、海洋研究に関わる大学や研究機関が集積し、近年関心が高まりつつある海洋分野の未来を担うポテンシャルを持っていることに加え、平成2年から全国に先駆けて取組を続けてきた客船誘致活動が、今後は、年間50～100隻の客船が訪れる国際クルーズ拠点化という形で新たなステージを迎え、飛躍を遂げようとしており、今まさにチャンスが訪れているともいえます。

そこで、これまでの清水港を支えてきた産業に加え、新たにチャンスが芽生えつつある「観光サービス業」や「先端的海洋産業」などを育て、国内外から人々が訪れる「国際海洋文化都市」を実現していくことが期待されています。

こうした流れをふまえ、地域関係者からも「深海、海洋、水生生物等をテーマとし、静岡市が推進するMICEにも大きく寄与するちきゅう海洋科学館（仮称）」、「大学、研究機関等と連携し、海洋文化についての発信力や交流人口の増加に資する拠点施設」等の提言が出され、地域の海洋関係資源を最大限に活かしながら、ウォーターフロントの賑わいや海洋教育、産学交流を活性化させることを視野に入れた、新たな海洋文化拠点施設の実現が期待されています。

この基本構想は、第3次静岡市総合計画の重点プロジェクトに掲げられた「港町・清水の海洋文化拠点の創出」を推進するため、新たな「海洋文化拠点施設」を計画、整備していくための基本的な考え方を示すものです。

この基本構想を出発点として、清水港周辺ならではの資源を活かしたオンリーワンの海洋文化拠点施設を実現し、その効果がこの施設単体にとどまらず、ウォーターフロントの賑わいや、人々の海洋への関心を高め、海洋の研究、産業を活性化させることで港町・清水の都市再生につながる施設となることを目指していきます。

2 海洋文化拠点施設の整備の背景

2-1 目指す都市のビジョン「国際海洋文化都市・清水」

清水は、海洋に関連する産業・経済を基盤に、港とまちが一体となって、発展、形成されてきた港町ですが、近年では、産業の変化に伴う、中心市街地の活力の低下や、東日本大震災以降、想定が見直された津波災害への懸念など、以前よりも厳しい状況に置かれていると言えます。

そこで、これからも、港や海があることが、魅力や強みと感じられるようなまちづくりを続けていくために、「国際海洋文化都市・清水」を都市のビジョンとして掲げ、これまで清水の成長・発展を支えた港湾産業都市の礎の上に、新たに、観光サービス産業や海洋新産業を育てながら、国内外から人々が訪れ、交流する仕組みをつくっていくことが必要です。

清水港の周辺には、その歴史を通じて、海洋に関連する産業、観光スポット、交通手段、大学や研究機関など、様々な地域資源が集積・立地し、現在も、清水が国内外へ誇れる力・魅力を持ったものが多く存在しています。また、近年の追い風として、平成25年の富士山の世界遺産登録などを契機とした観光、クルーズ船の需要の高まりや、平成19年の海洋基本法の制定を契機とした海洋への社会的な関心の高まりなどもあります。

今後は、産学民官の関係者が垣根を越えて連携し、こうした清水における海洋や港に由来する資源やチャンスを活かして新たな海洋産業・研究、観光交流等を活発に創出し、国内外から人々が訪れ交流する「国際海洋文化都市」の実現を目指していきます。

「国際海洋文化都市」を実現していくために、具体的には、海洋をテーマとした「人材育成」、「産業・ビジネス振興」、「にぎわい創出」の3つの取り組みを以下のように、相互連携させながら進めていきます。

①海洋人材の育成

清水港と関係の深い海洋学術・研究機関や、「海のみらい静岡友の会」等の民間活動を始めとする産学民官の関係者の連携により、市民の海洋への関心を高める普及啓発や高度な海洋人材育成を行います

②海洋産業・ビジネスの振興

海洋に係る企業・研究機関により構成された「静岡市海洋産業クラスター協議会」をプラットフォームとして、海洋産業イノベーションを進め、新たな経済活動、雇用を創出していきます

③海を活かしたにぎわいの創出

客船寄港の増加や物流機能の移転などにより、大きく変化しつつある日の出地区を始めとして、駅前の江尻漁港地区や、水上バスで結ばれた三保地区などにおいて、賑わい空間の創出や回遊動線の整備を進め、観光交流人口増加やMICE誘致を進めます

以上の海洋を軸とした「まち」「ひと」「しごと」の創出を進めていくことで、将来は、このエリアへ、海洋産業や研究の機能がさらに集積し、海洋産業・研究が活発化するとともに、海洋への関心・親しみが高い市民、海洋に関わる仕事や学びをしている市民が増えていくことが期待されます。

図表 2-1 清水港周辺の海洋関連地域資源



2-2 日の出地区における海洋文化拠点の創出

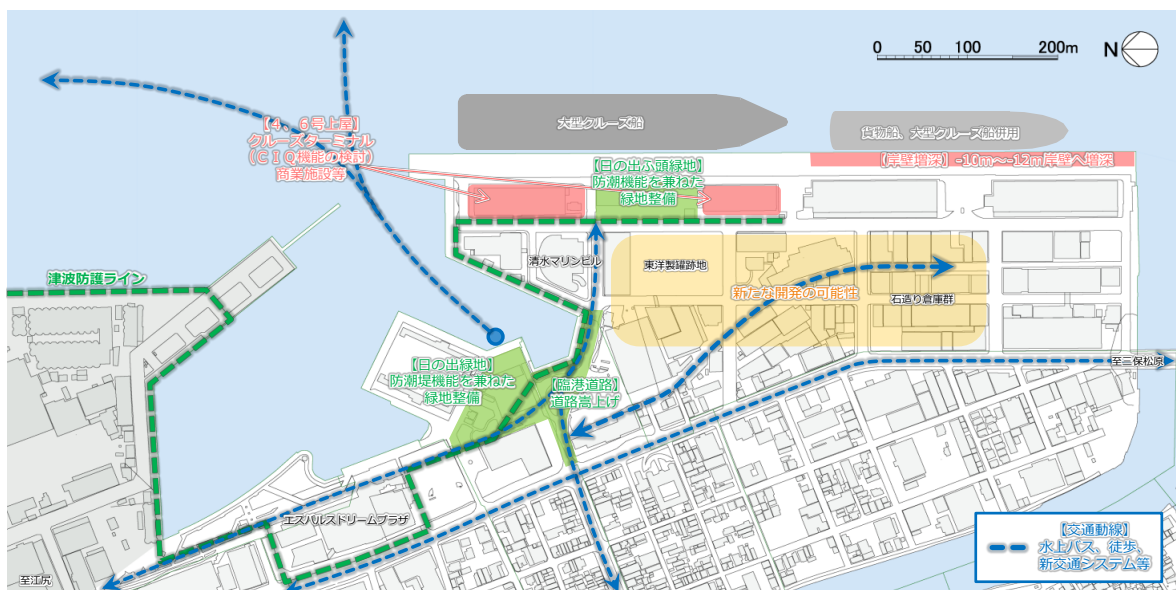
「国際海洋文化都市・清水」の実現に向けて、日の出地区を海洋に関する様々な活動や交流が活発に行われる「海洋文化拠点」にしていきます。

日の出地区は、近代清水港の発祥となった地区であり、既に交流機能が整備されている第1期再開発エリア（マリンプーク、ドリームプラザ等）に加え、現在、客船が寄港している日の出頭周辺においても、今後、物流機能から交流機能への転換が進められ、国際クルーズ拠点の形成など、周辺の開発が期待されています。

また、既存の観光・交流施設での集客に加え、増加が期待される客船寄港により、国内外から多くの人々が訪れるにぎわいの中心地となることが期待されています。

そこで、日の出地区においては、清水港港湾計画や清水都心ウォーターフロント地区開発基本方針などの全体計画によるコーディネートのもと、官民の様々な主体が行う事業を通じて、海洋に関連する様々な活動・機能を呼び込んだり、一体的な空間づくりを集中的に進めていきます。

図表 2-2 日の出エリアの将来像



2-3 海洋文化拠点施設整備の必要性

以上の背景を踏まえ、国際海洋文化都市のシンボルとなり、その中の海洋文化拠点となる日の出地区において、周辺のにぎわいづくりを促す、新たな「海洋文化拠点施設」の整備が必要です。

その「海洋文化拠点施設」は、国際海洋文化都市への愛着（シビック・プライド）や、にぎわいづくりに結びつける観点から、清水港周辺が誇るべき「駿河湾」や、海洋関連学術・研究機関の集積を活かし、「海洋」を通じて人々が集まることができる施設として、

「海洋・地球に関する総合ミュージアム」

を目指すものとします。

「海洋・地球に関する総合ミュージアム」を整備することにより、地域や人々に対して、以下のような効果をもたらすことを目指します。

- ①国際海洋文化都市の実現に向けた「海洋人材の育成」、「海洋産業・ビジネスの振興」、「海を活かしたにぎわいづくり」の取り組みを推進する効果
 - ・海洋と人との関わり、海洋の可能性を伝え、未来の海洋人材を育てます
 - ・海洋産業振興に向けた情報交流の場となり、海洋産業・ビジネスを活性化させます
 - ・ウォーターフロントのにぎわいを生み出し、観光交流の創出、MICEの誘致を図ります
- ②日の出地区の魅力を高める効果
 - ・周辺環境とデザインの調和を図り、ウォーターフロントの空間イメージを向上させます
 - ・周辺開発を促し、日の出地区の交流空間の拡大を図ります
- ③施設整備・運営による雇用の創出、経済波及
 - ・ウォーターフロントへの集客力を高め、観光・文化・海洋関連の雇用を生み出します
 - ・施設と周辺の観光回遊を結び付けて観光消費を拡大させ、地域経済を活性化させます

図表 2-3 海洋文化拠点施設とその背景となるまちの考え方

都市ビジョン 国際海洋文化都市・清水(清水港とその周辺)

海洋や港に関する資源やチャンスを活かして新たな海洋産業・研究、観光交流等を活発に創出し、国内外から人々が訪れ交流する都市

「国際海洋文化都市」実現に向けた産学民官による取組の柱

- ①海洋人材の育成
- ②海洋産業・ビジネスの振興
- ③海を活かしたにぎわいの創出

海洋文化拠点の創出(日の出地区)

海洋関連の活動・交流が特に活発に行われる拠点
国際クルーズ拠点形成との連携

海洋文化拠点施設



→「海洋・地球に関する総合ミュージアム」

- ・「国際海洋文化都市」のシンボル
- ・日の出地区開発を活性化

3 海洋文化拠点施設の基本的な方針について

3-1 施設のテーマや利用の想定

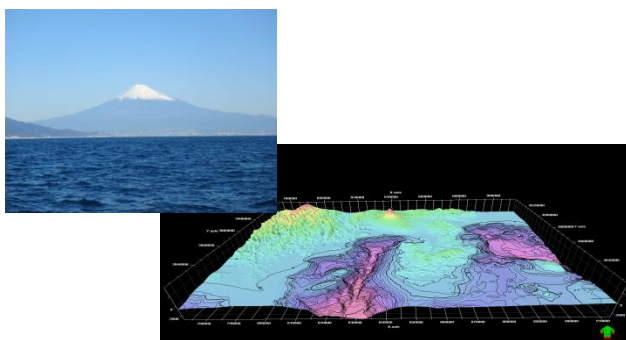
(1) 「海洋・地球に関する総合ミュージアム」のテーマ

清水で実現する「海洋・地球に関する総合ミュージアム」ならではの発信テーマとして、以下の2点を柱とします。

①海洋・地球の営みや魅力が凝縮された「駿河湾」の発信

- ・静岡市民にとって身近であり、海洋・地球の営みや魅力が凝縮された、世界的にみても特色のある海である「駿河湾」について、生物、地形、海流等、様々な観点から紹介し、その奥深さを総合的に理解できる展示・発信を行います。
- ・-2,500mと日本一の深さを持つ「駿河湾」について、3,000m級の富士山や南アルプスから高低差5,000m以上の、他にない一体の地形・環境として捉えて紹介します。

図表 3-1 駿河湾の特色やコンテンツイメージ



駿河湾の下に広がる深海の世界の紹介
(東海大学坂本准教授提供)



駿河湾の深海生物の紹介
(東海大学海洋科学博物館ホームページ)

②海洋・地球のフロンティアに触れ、海への関わり、意識を高めることができる場

- ・国内外の研究機関や海洋博物館と連携を図りながら、最先端の研究動向も含めた海洋・地球についての総合的な発信を行います。
- ・専門的な海洋調査・研究活動をわかりやすい展示・プログラムへ編集することで、来館者へ、常に新鮮な知的満足感を与えていきます。学術・研究機関にとっても、ここが、調査研究成果をいち早くPRできる拠点となるといったメリットを提供していきます。
- ・また、総合的、先端的な発信を行う一方で、幅広い市民、訪れた人たちが、海と関わるリテラシー（感性・知識・考え方・行動等）を学べる展示や体験的なプログラムを用意します。

図表 3-2 海洋・地球に関するコンテンツイメージ



深海調査の様子の紹介イメージ (©JAMSTEC)



深海魚の胃の内容物観察から海洋汚染を観察・学習
(東海大学坂本准教授提供)

(2) ターゲットの想定

海洋・地球をテーマとして扱うことや、客船寄港や観光地という清水港周辺の特性から、海洋文化拠点施設がターゲットとする利用者層は、主に以下のように予想されます。

これらのターゲット層をふまえ、来館者の満足度を多面的に高めていく必要があります。

図表 3-3 想定されるターゲット層

主なターゲット層	主な来訪動機	施設の訪問への主な期待	清水での利用者想定
近隣圏域の居住者 (個人旅行者)	休日等に身近な観光地で、個人、家族等と文化的な余暇を過ごす	エデュテインメント (教育+わかりやすさ) レクリエーション	東海・関東・甲信越エリアからの日帰り圏旅行者
国内・団体旅行者	静岡、三保、日本平、伊豆等、周辺と一体のツアープログラムで訪れる	ツアー全体を通じた思い出・印象	東海・関東・甲信越エリアを中心とした国内旅行者
海外インバウンド旅行者	富士山・駿河湾や日本の魅力、非日常的体験への期待	清水らしいコンテンツ 富士山等の美しい風景	日の出地区への客船寄港(将来年間寄港数50~100回)
地元の児童生徒・学生	学校教育との連携により、課外授業等で海・港に関心を持って訪れる	海の理解につながる体験 海・港への愛着(シビックプライド)	市内小中学生 (約5万人)
コアな海洋ファン	本物のサイエンスに触れ、同じ関心の人・専門家等とのコミュニケーションを期待した訪問	本物・実物 専門的コミュニティ・イベント等への参加	居住地に関わらずメディア等を通じて国内外から誘引
海洋専門家・研究者等	学会・会議・共同研究等、研究者間ネットワーク等を通じて来訪	専門的情報・実物 展示・発信手法等	MICEの開催等により誘引

(3) 施設利用の想定

ターゲット層もふまえ、海洋文化拠点施設の利用については、以下のような利用を想定します。MICEや、研究者利用、学校教育など、一般見学利用以外の利用に対しても、柔軟に対応していく施設を目指します。

一般見学利用

- ・ 海洋・地球への関心を持ちつつ、余暇や観光としての楽しみも期待して来館

MICE・ツアーの利用

- ・ ツアープログラム等に組み込まれた目的地の一部として利用
- ・ 遠方からの来訪で、地域の特色、印象を期待

学校教育・社会教育利用

- ・ 展示の見学や体験・講演等により、学びを深める目的で利用
- ・ 学校や生涯学習施設など、施設間との連携

研究者や学生の利用

- ・ 資料やデータ等、専門的な目的で利用
- ・ 専門人材同士のコミュニケーションを期待
- ・ 研究成果の交流や発信の場を期待

3-2 施設の機能や運営の基本的な方針

(1) 施設機能の構成

「海洋・地球に関する総合ミュージアム」を構成する主要な機能は以下のとおりです。

① 展示機能

《水族館機能》

- ・ 日本一の深さを持つ駿河湾や中部日本沿岸を中心とした海洋生物等の展示を行います。
- ・ 運営にあたって、三保にある東海大学海洋科学博物館の水槽等設備と連携し、展示の効率化や、展示と研究の連携強化を図ることを検討します。(三保の施設をバックヤードとして活用・連携し、海洋文化拠点施設だけではまかなえない関連研究を三保で行うことなどを検討。)

《博物館機能》

- ・ 駿河湾を起点に、海洋と地球のしくみを一体的に伝える展示を行います。
- ・ 海洋に関する多岐にわたるテーマについて、ここに来れば、総合的、体系的に学ぶことができる展示を行います。
- ・ 特に、現在も調査研究が進んでおり、未知の部分が多い「深海」について、生態系、鉱物資源、地形地質、地震防災などの多面的な観点から紹介します。
- ・ 最新研究成果など、関心の高いトピックを機動的に発信できるように、固定的な展示物だけでなく、企画展、セミナー、ICT（情報通信技術）等の手法を活用した発信を行います。

② 展示開発・評価改善機能

- ・ 海洋・地球に関し、現在進行形で行われている調査・研究の活動を、できる限りわかりやすく、体験的に伝える、という本施設の特色を踏まえて、専門的な研究内容を展示・プログラムとして適切に編集しなおす「展示開発」の機能や、「エバリュエーション」とも呼ばれる展示内容を来館者の目線で評価し改善につなげる「評価改善」機能を重視します。
- ・ 東海大学や海洋研究開発機構（JAMSTEC）など駿河湾周辺に関連する研究機関と連携し、海洋・地球に関する最新の調査・研究動向を情報交換しながら、本施設での展示・発信につなげるためのコラボレーションを積極的に進めます。

③ 研究・教育連携機能

- ・ 東海大学やJAMSTECなど駿河湾周辺に関連する研究機関と連携し、海洋関連研究成果を集め、広く一般の方々にわかりやすく伝えていくための機能を設けます。
- ・ 小中学校教育や、幅広い世代の社会教育と連携し、ワークショップやガイダンスなどの活動ができる機能を設けます。

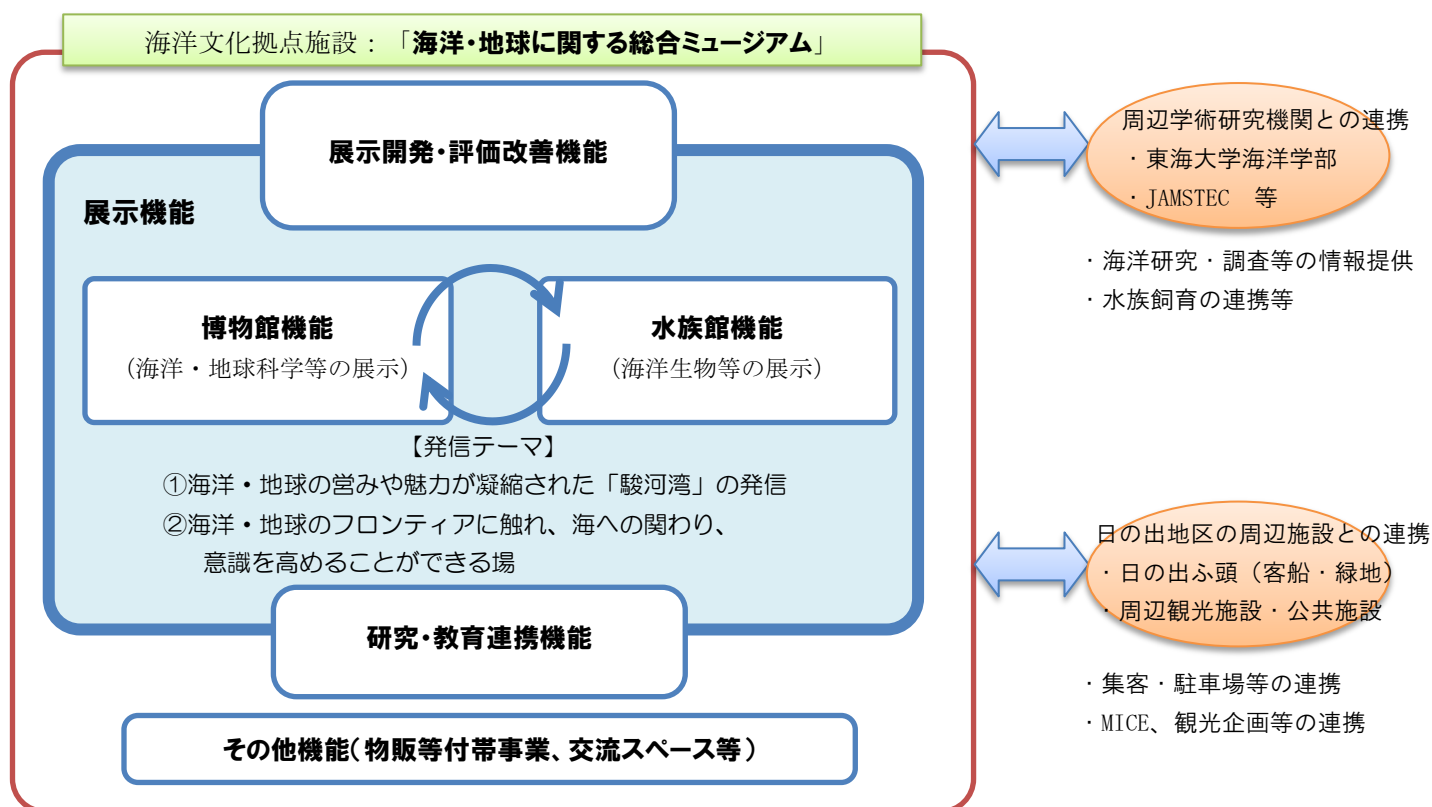
④ その他の機能

施設内および、施設周辺での快適な滞在や、訪れた人々同士の交流が深まることをねらいとして、下記のような機能を必要に応じ設けます。

また、これらは、施設周辺と一体的に機能するものであるため、周辺と連携しながら規模や内容を適宜検討するものとします。

- ・施設利用者の快適性・来館満足度を高める軽飲食施設や、グッズ等の販売施設の機能
- ・訪れた人々が自由に活動、交流できる場となり、MICE（国際会議やレセプション等）にも活用可能な柔軟性を持ったゆとりある公共的空間

図表 3-4 海洋文化拠点施設（海洋・地球に関する総合ミュージアム）の機能概要



(2) 施設の整備・運営等の基本方針

「海洋・地球に関する総合ミュージアム」が、清水港周辺の特性を活かし、より効果を発揮できる「海洋文化拠点施設」となるため、その整備・運営に当たっての基本方針を以下のとおりまとめます。

施設の実現に当たっては、以下の点を重視しながら、特色のある施設を目指していきます。

ア 《海洋・地球に関する総合的な展示の実現》

- ①水族展示と海洋地球展示が融合した総合的な海洋展示を行う
- ②展示テーマをふまえ、適切な展示手法、資料収集機能等を備える

イ 《体験的学習や、幅広い世代へのより深い学びの機会の提供》

- ①小中学校における「海洋教育」の強化を意識して、全国の学校から児童たちが海洋についてより深く学びに来る
- ②生涯学習として、海洋について楽しく学ぶことができる
- ③他の文化的施設等との地域連携を図る
- ④清水港を中心とした海洋・地球のフィールドに出て、体験・教育が展開できる

ウ 《周辺環境と連携したにぎわいづくり》

- ①日の出地区の環境を活かし、日の出ふ頭と連携した施設とする
- ②周辺の環境と連動して、ウォーターフロント地区への滞在時間を伸ばす

エ 《清水港ならではの産学関係者との連携》

- ①清水港周辺における海洋関連学術研究機関との協力をベースとした施設とする
- ②連携する研究機関と共に、世界的な視野を持つ
- ③清水の海洋研究や海洋産業のイノベーションに関する情報交流・PR 拠点となる

オ 《施設の持続性を重視した運営》

- ①施設経営の持続性を高める
- ②展示や運営の持続性を高める
- ③運営に係る人材・体制の確保

ア 《海洋・地球に関する総合的な展示の実現》

① 水族展示と海洋地球展示が融合した総合的な海洋展示を行う

- ・海洋を総合的に伝える施設として、海洋の生命・生態を飼育、展示、標本等の形で伝える「水族館」的な機能と、それらの海洋生物がどのような海洋環境の中で生きているのか、どのような地球の歴史の中で生まれてきたのか、といった「地球・海洋博物館」的な機能を融合し、最新の知見を一体で展示していく施設を目指します。

② 展示テーマをふまえ、適切な展示手法、資料収集機能等を備える

- ・ 展示や資料収集は、情報化社会への対応や、海洋研究等の最先端の状況を発信していくことを考慮し、実物、模型等のみならず、デジタル化（タブレット等のデバイスとの連携、データベースの公開等）により、展示施設の可変対応性を高めたり、国内外への情報発信性を高め、施設運営の効率性を高めていくことも重要です。
- ・ 海洋という幅広い領域を印象的に伝える方法として、ハンズオン展示（体験型、双方向型の展示手法）を効果的に導入することが重要です。

イ 《体験的学習や、幅広い世代へのより深い学びの機会の提供》

① 小中学校における「海洋教育」の強化を意識して、全国の学校から児童たちが海洋についてより深く学びに来る

- ・ 海洋教育については、今後、国レベルで学習指導要領に取り入れる動きがあるなど、これからは、海洋国家日本に暮らす全国の子供たちにとって、海洋の総合的な教育が、より身近になっていく時代が予想されます。そこで、本施設は、そうした展望をふまえ、海洋の学びを深める場として、静岡市内の児童はもとより、全国の小中学校、児童から必要とされる施設となることを目指します。

② 生涯学習として、海洋について楽しく学ぶことができる

- ・ 生涯学習社会にあって、多世代の多様な学びの意欲に応えるよう、海洋研究の紹介や体験プログラム、教材を提供していくことを目指します。
- ・ ミュージアムボランティア、市民解説員などの仕組みにより、活動しながら学びを深める機会をつくることも考えられます。

③ 他の文化的施設等との地域連携を図る

- ・ 地域の公民館や図書館、他の博物館などの文化的施設等と連携して、異分野とのコラボレーションや、広報宣伝を行い、利用者の裾野を広げます。

④ 清水港を中心とした海洋・地球のフィールドに出て、体験・教育が展開できる

- ・ 清水港周辺には、海浜での地引網や静穏な湾内水域を活かした海洋レジャー、船舶での周辺航海など、海洋の恵まれた屋外環境があり、施設内の展示と連携して、体験・教育を深めることができます。
- ・ さらに広域の周辺には、地球環境史ミュージアム、南アルプスユネスコエコパーク、世界で最も美しい湾クラブ加盟の駿河湾、伊豆半島ジオパーク、世界文化遺産富士山、など、ダイナミックに地球を感じることができる施設、エリアが集まっており、それらとも積極的に連携を図っていくことが可能です。

ウ 《周辺環境と連携したにぎわいづくり》

① 日の出地区の環境を活かし、日の出ふ頭と連携した施設とする

- ・日の出ふ頭は、従来より、フェリー、クルーズ客船をはじめ、日本丸、海王丸などの帆船や、東海大学の望星丸、JAMSTECの研究船など、市民が様々な船舶を利用、見学するため訪れる場となっています。
- ・そこで、本施設は、日の出ふ頭との近接性を活かし、例えば、JAMSTECや東海大学の研究船の一般公開と、施設の展示を連携させたり、施設でガイダンスを行ったうえで、日の出ふ頭から体験航海に出るなど、ふ頭があることを強みとした施設を目指します。
- ・また、クルーズ客船等で訪れる人たちにとって、清水港に上陸して最初に目に触れる施設の一つであることから、世界からの来訪者を視野に入れて、展示や滞在の空間としての質を高めることを目指します。

② 周辺の環境と連動して、ウォーターフロント地区への滞在時間を伸ばす

- ・本施設と、周辺の他の施設を利用、回遊し、その途中では、海辺の空間、富士山への眺望などの魅力を感じる一体的な地域づくりを進めていく視点が重要です。そのために、本施設は、日の出地区の時間消費の核となる施設の一つとなることを目指します。
- ・この施設単体に閉じて滞在時間を伸ばすだけではなく、周辺とも連携して、この地域でのトータルの滞在時間を伸ばすことを考えながら運営していくことが重要です。
- ・こうしたことから、施設を周辺に対して適切に開かれたデザインとしたり、憩いや交流、さらには津波避難の機能も兼ねた公共的な空間を設けることを検討します。
- ・観光・集客資源の集積を活かして、周辺施設や交通機関等との割引サービスなどの連携が考えられます。

エ 《清水港ならではの産学関係者との連携》

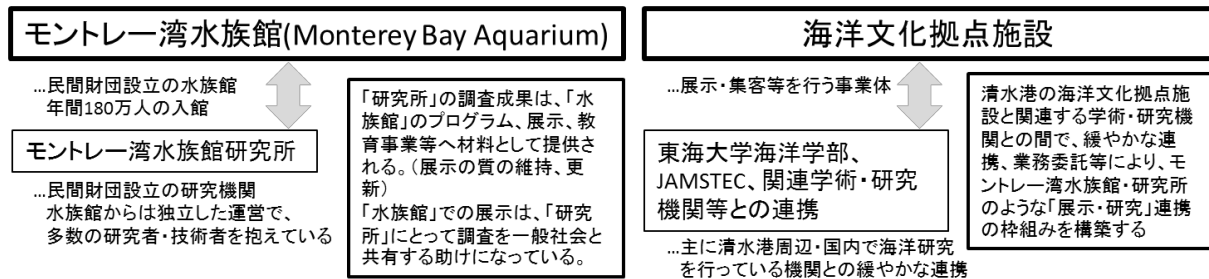
① 清水港周辺における海洋関連学術研究機関との協力をベースとした施設とする

- ・本施設においては、海洋に関する総合的な学び、普及啓発を行い、そのコンテンツの質を高いレベルで維持していくため、海洋専門の学術・研究機関との連携をベースとした施設を目指します。
- ・清水港の周辺において推進する本プロジェクトにとって連携すべき学術研究機関として、まず考えられるのは、「東海大学（※1）」です。海洋学部として長い歴史を持ち、さらに海洋科学博物館も運営してきた実績も持つ「東海大学」は、他にとって替えがたい地域の資源と言えます。
- ・世界的に評価されているアメリカのモンレー湾水族館（※2）の例に代表されるように、展示施設と専門的な研究機関との連携は、展示施設、研究機関の双方にとって、質を高めるメリットがあると考えられますが、清水港においては、東海大学海洋学部があり、それができる環境にあると言えます。
- ・このほかに、清水港を拠点に活動する地球深部探査船「ちきゅう」を運営するJAMSTEC、近隣の大学、研究機関など、海洋・地球科学に関して、清水港と縁のある機関とも

連携していくことが考えられます。

- ・海洋に関する最先端、リアルタイムな研究成果を展示、発信できる常設施設となることで、利用者が飽きないコンテンツを提供し続けることができ、また、研究機関にとっても、アウトリーチや広報の機会となり、双方にメリットが生まれる施設運営が期待されます。

図表 3-5 モントレー湾水族館の運営体制を参考とした海洋文化拠点施設運営イメージ



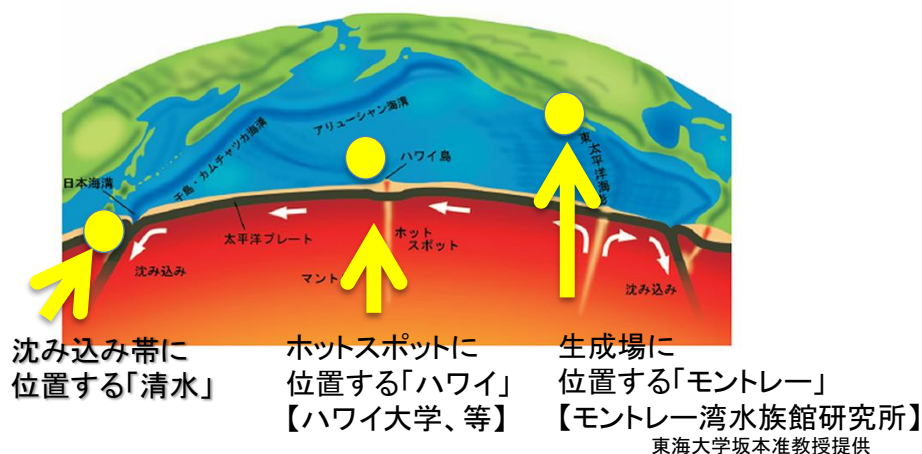
※1…東海大学は、三保地区において1970年から、大学施設としての海洋科学博物館を運営してきた実績があります。同施設は、水族の飼育展示についての高い質や全国への水族館人材輩出等の面で国内外でも高い評価を得ているばかりでなく、水族展示と海洋・地球・自然史を含めた国内でも類を見ない総合的な海洋展示を行ってきました。海洋文化拠点施設を整備していく場合には、同施設を含む三保地区の東海大学拠点は、研究機能への特化や、展示施設のバックヤード機能へ転換するなどの形で連携していくことが考えられます。

※2…モンレー湾水族館は、アメリカ西海岸にある民間の水族館です。民間財団により、展示施設であるモンレー湾水族館と、研究所であるモンレー湾水族館研究所がそれぞれ設立され、展示施設と、最新の海洋研究活動が適度に独立、連携しながら、質の高い展示と、発信力のある研究活動が長期間にわたって継続されています。

② 連携する研究機関と共に、世界的な視野を持つ

- ・東海大学海洋学部、JAMSTECは、それぞれ、特に海洋の研究において、グローバルなネットワークを持っています。本施設では、そうしたネットワークを活用し、海洋・地球についての世界レベルの視野や情報を持った施設を目指します。
- ・グローバルなネットワークを持つことで、太平洋のプレート生成帯であるアメリカ大陸西海岸からプレートの沈み込み帯である駿河湾までを連続的に捉えた海洋・地球の紹介が可能となり、海洋を切り口とした地域間交流にも貢献することが期待されます。

図表 3-6 駿河湾から太平洋へグローバルな連携・交流のイメージ



③ 清水の海洋研究や海洋産業のイノベーションに関する情報交流・PR 拠点となる

- ・本施設は、展示・交流を主要機能とした施設を想定し、産業・研究を専門的に実施する施設ではないものの、清水港周辺で行われる産学官の海洋産業イノベーションの活動（静岡市海洋産業クラスター創造事業）とも連携し、本施設において産学関係者による情報発信や交流が活発に行われ、海洋研究、産業イノベーションの活性化にも寄与する施設を目指します。
- ・産業や研究関係者にとっても関心の高い施設となることで、本施設は、清水港日の出地区を中心とした、海洋MICE（学会・会議、視察、展示等）にも活用されることが期待されます。（MICE誘致の際のユニークベニュー（文化施設や公的空間等を利用したレセプション等の開催）としての活用も期待されます。）
- ・また、地域の海洋産業イノベーション（※）を支援、活性化することにより、将来的に海洋産業イノベーションの推進や産学機関・関係者の更なる集積にもつなげていきます。

※清水港周辺における海洋産業イノベーションの取組

- ・清水港周辺では、海洋関連の産学官関係者が、それぞれの研究成果や産業ニーズ・シーズを融合させて、新たな産業に進化させるイノベーションの推進を図っていく動きが生まれつつあります。（平成 28 年度、静岡市海洋産業クラスター協議会の設立）
- ・国の政策においても、「海洋」は、未知なる資源の発見や技術革新により、新たな産業・経済活動を生み出す潜在力を見込んでおり、各地、各分野で活発な産学イノベーションが模索されています。

オ 《施設の持続性を重視した運営》

① 施設経営の持続性を高める

- ・施設の整備、運営は、可能な限り利用者の入館料、館内消費による収入により維持継続されていくことを目指します。そのために、民間の集客施設運営ノウハウ等を取り入れた官民連携型事業手法を検討していきます。

- ・そのために、施設規模等初期投資の精査や、継続的に多くの来場者に訪れてもらうことや、効率的な経営ための不断の取り組みが求められます。
- ・一方で、この施設を最大限に活かすために、教育、研究支援等を行ったり、ウォーターフロント環境と連携した公共的空間を確保するなど、入場料等の負担によることが難しいものについては、公共的な負担の仕組みなどを検討していきます。

② 展示や運営の持続性を高める

- ・海洋・地球に関する先端的な研究と連動した展示を継続していくためには、施設運営主体と外部学術研究機関との連携の仕組みが重要となります。具体的には、施設と連携する窓口として、複数の学術研究機関から構成されるコンソーシアムを立ち上げることも考えられます。
- ・外部学術研究機関との連携を行う際に、研究成果等を展示やプログラムに活かすための具体的な仕組みや経費の課題を検討していきます。

③ 運営に係る人材・体制の確保

- ・海洋・地球の総合的なミュージアムとしての規模や機能を加味した人材の確保が必要です。その際には、地域の雇用の創出や、適切な技術習得の期間も含めた雇用等を検討する必要があります。
- ・特に、生物や博物館の経営、建築施工に関して知識のあるコアメンバー（人財）は、施設の継続性にも関わる重要な要素であり、施設・展示の計画の段階から関わることで、運営や維持管理の際に使い勝手の良い施設計画とすることが期待できます。
- ・文化施設の運営において、「事業・経営面の管理」と、「コンテンツ、プログラム面の充実・創造」という両輪のバランスを保つことは、重要な課題です。相互に理解、連携しあえる両輪の要となるスペシャリストによる体制づくりが必要です。

3-3 施設の規模・立地等の想定

(1) 想定される諸室例

海洋文化拠点施設の機能や目的の達成のために必要な諸室を以下のように整理します。これらは、すべてを海洋文化拠点施設内に設けなければならないという考え方ではなく、機能によっては、周辺施設等との連携により、規模、内容等を調整することもあると想定します。

図表 3-7 海洋文化拠点施設の必要諸室例

必要諸室例	概要
常設展示室 (水族館機能) (博物館機能)	<ul style="list-style-type: none"> 駿河湾を始めとした海洋に関する幅広い研究蓄積を常時展示する空間 駿河湾をテーマとした海洋生物の展示(水族館機能) 海洋環境、海洋地質など海洋に関する学術的蓄積の展示(博物館機能)
企画展示室	<ul style="list-style-type: none"> 最新研究の紹介、研究船公開など清水や駿河湾と関連するトピックなどを取り上げ、一定期間展示を行えるフレキシブルな空間
ラボ、セミナー ーム等	<ul style="list-style-type: none"> 東海大学や JAMSTEC 等と連携し、セミナーやプレゼンテーション、簡易な実験等、体験的な方法で、駿河湾の環境や最先端の海洋研究をわかりやすく伝える空間
シアター機能等	<ul style="list-style-type: none"> 調査研究で撮影された映像などのコンテンツを活かし、海洋・地球について体感できるシアターの空間
交流スペース	<ul style="list-style-type: none"> クルーズ船等、観光で日の出地区を訪れた人々の利用、市民による活動、企業等と連携したイベント利用等のための公共的空間
カフェ・売店等 (付帯事業)	<ul style="list-style-type: none"> 海洋文化拠点施設を訪れた人々が憩う空間 海洋文化拠点内の既存施設の利用や、新たな民間投資による施設整備が期待される オリジナル商品の開発など、独自性を高める工夫
収蔵庫	<ul style="list-style-type: none"> 貴重な研究資料などを保管するための津波対策等を考慮した空間 デジタルアーカイブ等の手法を用い、検索・活用できるよう整理する
キーパー スペース・調餌室	<ul style="list-style-type: none"> 水族の飼育などを行うスペース 展示の一部(バックヤードツアー等)とも捉えて計画する
事務室、機械室等	<ul style="list-style-type: none"> 施設の運営、維持管理に必要なスペース

(2) 想定される施設規模

海洋文化拠点施設の規模は、東海大学海洋科学博物館(約 6,400 m²)を含む類似施設(水族館等)等の規模を踏まえ、数千 m²から 10,000 m²前後を想定し、今後の具体化の検討において、必要な機能、事業性、来館者の快適性などを総合的に考慮し、規模を決定していきます。

また、必要な機能に関しては、積極的に既存の周辺施設との連携を図ることで、周辺地域への回遊性の向上と施設整備負担の軽減に努めることとします。

(3) 海洋文化拠点施設の立地選定条件

海洋文化拠点施設について、望ましい立地の選定の方針として以下の3つの視点を重視します。

- ①敷地規模 : 想定施設規模に対応可能な、まとまった敷地の確保
- ②海との近接性 : 海洋のテーマにふさわしい、海への眺望、海との関わりが持てる立地
- ③観光集客 : アクセスしやすく、にぎわいを面的に波及させることができる立地

これらの方針を満たす場所として、下記の点から、日の出ふ頭背後のエリアが最も適していると考えられます。

- ①敷地規模 →まとまった規模で、比較的低未利用または暫定的土地利用の土地がある
- ②海との近接性 →客船ふ頭と近く、施設と船舶・海の連携が可能
- ③観光集客 →市街地や既存の商業施設・緑地等から日の出ふ頭への動線上に位置する

図表 3-8 海洋文化拠点施設の候補地



なお、今後、このエリアでの整備を進めるためには、下記のような複数の課題等を検討していく必要があります。

- ①民間所有地について、土地取得等が必要
- ②津波浸水想定区域にあることから、施設計画において対策が必要
- ③海洋生物の展示・飼育に必要な海水調達方法の検討が必要
- ④大規模な集客に対応する駐車場、交通アクセスの対策が必要
- ⑤施設計画を進める際、日の出地区の周辺開発との連携、調整が必要

4 「海洋文化拠点施設」の実現に向けた進め方

4-1 事業手法の考え方

海洋文化拠点施設は、入館料等、受益者による一定の負担が想定され、類似施設（水族館等）では民営の事例も見られる「文化施設」であるという性格をふまえ、民間活力とも連携した様々な官民連携事業手法（PPP＝パブリック・プライベート・パートナーシップ）による実現が考えられます。

PPPの手法には、公共で整備し民間に運営を委託する管理運営委託や、民間で建設を行うPFI、第3セクター、公有地借地方式など、幅広い手法が含まれており、事業内容や関係主体の特性等に応じて、今後、施設の内容を詰めながら、最適な方法を選択していきます。

今後の検討における官民連携事業手法の選択の際の基本的な視点としては、以下が挙げられます。

- ①本基本構想に示した整備・運営に当たっての基本的方針を実現できること。
- ②「入館料等収入による自立的な事業継続性」と「海洋研究・教育との連携等の公益性の確保」とのバランスから、官民双方にとって最適な負担のあり方となること。
- ③民間事業者にとって、創意工夫やノウハウを効果的に発揮しやすい事業参画環境となること。

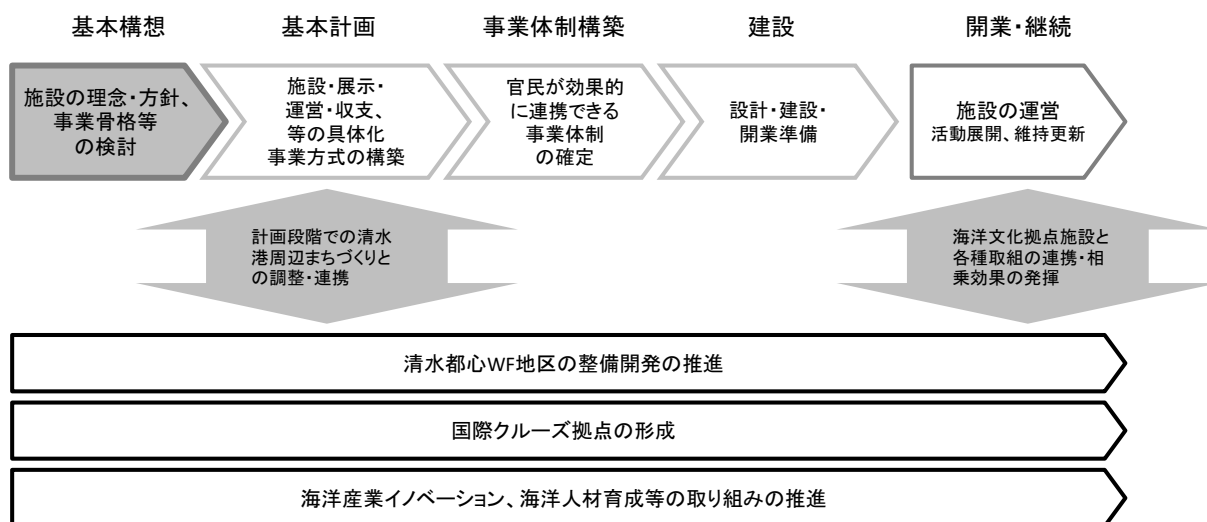
また、事業手法の選択に当たっては、事業の概要（規模、期間、収支の見込み等）や官民の負担の分担、市場の資金調達環境等を踏まえ、施設整備や運営等、事業実施段階における様々な役割分担、条件を詰めながら検討していくこととします。

4-2 今後の進め方

平成 29 年度以降、本基本構想に示したコンセプト、導入機能および計画条件を踏まえ、海洋文化拠点施設整備・運営事業の内容をより具体化するとともに、実現可能な事業方式について官民連携手法を中心に検討し、事業方式を構築していきます。

その後、固まった事業方式に従って、事業の実施枠組み、体制を固め、その事業体制に基づいて、海洋文化拠点施設の整備・運営を進めていく方針です。

図表 4-1 海洋文化拠点施設実現に向けたプロセス



參考資料

■基本構想策定に至る経緯

清水港におけるウォーターフロント活性化や海洋文化拠点づくりについては、本基本構想策定に至るまでに、官民関係者により、主に下記のような経緯がありました。

平成 25 年度

- 清水都心 WF 活性化に関する検討（静岡市）
→江尻～日の出のウォーターフロント地区を活性化していく方針を検討

平成 26 年度

- 駿河湾港整備基本計画策定（静岡県）
→清水港整備の方針へウォーターフロント活性化を反映
- 清水港周辺の賑わい創出に関する提言書（魅力ある清水を創る会）
→「学術・教育施設としての「ちきゅう海洋科学館（仮称）」構想の実現」を提言
- 第3次静岡市総合計画策定（静岡市）
→「港町・清水の海洋文化拠点の創出」「清水港ウォーターフロントの賑わいづくり」を掲載

平成 27 年度

- 清水港海岸 江尻・日の出地区 津波防護施設整備計画策定（静岡県）
→港の利用や景観に配慮した防潮堤整備の方針を策定
- 政府機関地方移転に「国立研究開発法人 海洋研究開発機構」と「国立研究開発法人 水産研究・教育機構」の2機関を申請（静岡県・静岡市）
- 清水都心 WF 地区開発推進会議の設置（静岡県・静岡市）
→江尻～日の出地区の都心ウォーターフロント地区の今後の整備開発の連携体制の立ち上げ
- 清水港周辺における海洋文化拠点づくりの推進に関する提言（静岡商工会議所）
→海洋関連の大学、研究機関と連携した海洋文化拠点施設の実現を提案

平成 28 年度

- 清水港が、国土交通省の「官民連携による国際クルーズ拠点」へ選定（静岡県）
→民間クルーズ船社と港湾管理者が連携し、クルーズ拠点整備を目指していく取り組んでいくこととなった
- 清水都心 WF 地区開発基本方針の策定（静岡県・静岡市）
→江尻～日の出地区の今後の整備開発の基本方針がまとめられた

■静岡市清水港周辺海洋文化拠点施設基本構想検討会議の開催

基本構想の策定にあたり、有識者、地域関係者から意見を伺うため「静岡市清水港周辺海洋文化拠点施設基本構想検討会議」を下記の通り開催しました。

●静岡市清水港周辺海洋文化拠点施設基本構想検討会議

第1回 平成29年1月6日(金) 13:00～15:00 旧青葉小学校会議棟3-A会議室
検討事項：基本構想の骨格等について

第2回 平成29年2月10日(金) 13:30～16:30 旧青葉小学校会議棟3-A会議室
検討事項：基本構想の素案、施設のコンテンツ等について

第3回 平成29年3月10日(金) 13:30～16:30 旧青葉小学校会議棟3-A会議室
検討事項：基本構想案のとりまとめ

静岡市清水港周辺海洋文化拠点施設基本構想検討会議名簿

(1～5五十音順)

	役職	氏名	備考
1	東海大学海洋科学博物館 館長	秋山 信彦	海洋研究
2	国立研究開発法人 海洋研究開発機構 理事	篠崎 資志	海洋研究
3	ハンズ・オン プランニング 代表	染川 香澄	博物館
4	福山大学 生命工学部 海洋生物科学科 教授	高田 浩二	博物館 ◎座長
5	静岡商工会議所 副会頭	村上 光廣	地域経済・ まちづくり
6	【静岡市】企画局 政策推進統括監	中島 一彦	静岡市 ○副座長
7	【静岡市】経済局 局長	赤堀 文宣	静岡市

※オブザーバー

	静岡県交通基盤部港湾局 局長	有本 彰男	港湾管理者
--	----------------	-------	-------

